

この「研究レターHem21オピニオン」は当機構の幹部、シニアフェロー、政策コーディネーター、上級研究員等が研究活動や最近の社会の課題について語るコラム集です。

(「Hem21」は、ひょうご震災記念21世紀研究機構の英語表記であるHyogo Earthquake Memorial 21st Century Research Instituteの略称です。)

発行:(公財) ひょうご震災記念21世紀研究機構 学術交流センター ☎078-262-5713 〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2 (人と防災未来センター)



たかが5年、されど5年

研究調査本部 政策コーディネーター 御厨 貴

「たかが5年、されど5年」の思いを強くすることが、最近が多い。3.11の東日本大震災から、この3月でちょうど5年がたつ。このところ、メディアからの取材を受けることが多い。5年たったの改めての取材を受けてみて、新たな感慨を催すのだ。そもそも聞き手は皆、5年前の震災と災後を直接には見聞きしなかった人ばかりだ。だからであろう、言葉のやりとりの中で、「どこか違うなあ」「いやそうじゃないよ」という違和感が募り、いつの間にやら一人取り残されている感を強くする。いや、彼等が決して言い加減な取材をしているわけではない。一応調査はしてきている。だから彼等の質問によって、こちらの頭の中では記憶にうっすらと遠い感じになっている事柄を、ハッと呼び覚まされることは、確かにあるのだ。

でも、心の中に生ずる違和感と孤独感、それは何なのだろう。一番手っとり早いのが、「復興構想会議」関連の話だ。五百旗頭、御厨、飯尾という政治学トリオでリードしたあの会議について、彼等の理解は通り一遍のごく普通の政府審議会という認識から、一步も出てはいないという印象を受ける。もちろん会議の議事録に目を通しては来ているのだが、あの会議の現場の雰囲気分からないから、「こうだったんですね」「要するにこういうことですね」という、すぐにまとめようとする常套句に焦ら立ち、「今から考えてうまくいかなかった点を2、3挙げてください」とのつき放したような質問に対しては、「おいおい、もう結論かい」と思いつつ、「ええとね…」と言いつつ、言葉が続かない。

「臨場感」の共有を求めても無理なこと位、端から了解している。「しかし」なのだ。愚痴のようで自分でも見苦しいと思うのだが、まあ聞いてほしい。「復興構想会議」については、2カ月半で仕上げた「提言」ばかりを話題にされて、そこから取材をスタートされても、こちらは感うのだ。あの尋常ならざる会議の持つ、そこら中をのた打ちまわり波動砲を撃ちまくるようなオーラを、少しでも感じとってもらわないと、いかんだ。思い切って何かを言おうとするが、思わず口の端を上ってくるのは、「まあ、あの会議も色々あってね、通常のことじゃないからな…」といったどうでもよい言葉の羅列だ。するといかにも善良そのものといった若い取材記者たちは、「分かる分かる」とばかりに首を縦に振って私に同情の念を示すや否や、「それでですね」と、今の時点での「復興の評価」ばかりを聞こうとする。ああ…

この4年、私は五百旗頭さんに誘われて、機構の政策コーディネーターとして、「三大震災復興過程の比較研究プロジェクト」を率いてきた。2年目からは「科学研究費」を取る

ことができ、関東、関西の若い研究者を糾合し、活発な研究会を催してきた。科研費研究会だけでも、この2月までで合宿を含めて20回に及ぶのだから、その濃さが理解できるだろう。関東大震災、阪神・淡路大震災、東日本大震災の比較研究なんて、始めた時はいかにも無謀な試みに見えた。普通の学術的常識から言えば、比較不能だからだ。しかし「震災復興研究」という分野は、未開拓の沃土そのものであった。そこにブルドーザーよろしく突き進む我等の研究会は、日を追うごとにドン・キホーテたる印象を薄め、様々な発見に満ち満ちた成果を生み始めた。「政策提言」まで含めてしっかりとした報告書に仕上がっていると思う。

そのプロセスで、私の「復興構想会議」にまつわる体験も、相対化していった。むしろ当時の思いにふけるのではなく、復興のあり方により添い、それを支援するプロジェクトに導かれるようになった。私が所属する東京大学先端科学技術研究センターの「大震災アーカイブプロジェクト」、東京大学生産技術研究所や情報学環、それに東北大学災害科学国際研究所等による「防災未来アーカイブ」研究会である。

「だが」とまともここで反転する。あの震災から5年たった今、「アーカイブ」に関心を寄せている私としては、最も身近にあった筈のあの「復興構想会議」についてのアーカイブを、ちゃんとせねばならぬのではないか。「未来防災」「予防防災」ということを言うならば、次の地震災害に備えて、今から「復興構想会議」のあるべき姿を見ずえておく必要がある。我々政治学トリオは、機構において新たな「復興検証」プロジェクトに今後主体的に係わるとともに、今こそ「復興構想会議」のオーラル・ヒストリーを開始せねばなるまい。幸い私もあの当時、阪神・淡路大震災の下河辺淳復興委員長に、「同時進行オーラル・ヒストリー」を行った故智を思い出し、内々で「同時進行オーラル・ヒストリー」を行って記録にしている。今ふり返るとまさに生々しい「怒り」の記憶であり記録であるが、5年たった今だからこそ、その先を考えることができよう。

御厨 貴氏

プロフィール Profile

1951年生まれ

博士(学術)

放送大学教授 東京大学先端科学技術研究センター客員教授

(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構研究調査本部政策

コーディネーター

最悪でも最善 窮地でも次善



阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター上級研究員 矢守 克也

東日本大震災を引き起こした地震・津波の発生から5年が経過した。先日、あるテレビ番組への出演を通して、福島県浪江町が直面した「あの日」について深く知る機会があった。

「あの日」とは、2011年3月12日。東京電力福島第一原発の事故に伴う住民避難に際し、よかれと思って避難した町内の山間部(原発から20km圏外)は、結果として、放射性物質の濃度の高いエリアだった。地震・津波による被害対応に加えて、思いもよらない原発事故の発生。国や県から知らされるはずだった情報や指示が入らない中で生じた悲劇だった。避難を主導した町役場職員の中には、今も、自分たちの判断は正しかったのだろうかと自問自答を繰り返している方もいらっしまった。規模の小さな自治体では、役場職員と地域住民の距離も近い。自分の判断が多くの知人、そして家族や親族に大きな影響を及ぼしてしまったとの思いもいっそう強くなる。

そんな経験と苦い思いを踏まえて浪江町が策定しようとしている新たな避難計画と訓練が、非常に印象的であった。「このバスに乗って避難しろと言うけど、責任取れるんだな」。このように大声で住民から詰め寄られた場面を想定して、そのときの対応を考える訓練が含まれていた。「あの日」、実際に起きたことだそう。今、各地で、国が示したガイドラインをベースにして原発事故を想定した避難計画が策定されつつある。しかし、こうした生々しい要素にまで立ち入っているケースは決して多くはない。

この訓練のファシリテーターが「正解はない」と話しているのを聞いて、手前みそではあるが、阪神・淡路大震災を体験した自治体職員を対象にしたインタビュー調査を基に筆者が作成した「防災ゲーム クロスロード」と共通する点が多いと感じた。「まさか神戸で地震が…」 「想定外の大洋波」と手痛い体験を重ねて少しずつ風向きは変わってきたようにも感じるが、防災業界は今もマニュアル文化が根強い。あ

らかじめ設定しておいた正解(その集積としてのマニュアル)通りに対応するのが王道という考えだ。しかし、阪神・淡路大震災の最大の教訓は、「そのとき、その場で、みなで正解をつくる」ことの大切さだったはずで、それが東日本大震災でも立証されたわけだ。

さて、避難計画に限らず、一般に防災計画は、「最悪でも最善」という方針で策定されている。最悪の事態が起こっても、人的被害は一切出さないという原理原則である。これは誠に結構な目標である。しかし、そこには「形式的理想性」という落とし穴が待ち構えている。最悪の災害が起きているのに、事前に準備した対策の方はなぜか当たり当たり、全て順調に機能して万事がうまく回っていく…。

確かにそれが理想だが、そんなタイプの計画や訓練だけに頼っていては、何か一つでも歯車が狂ったとき、その窮地から事態を回復させる力は養われないだろう。事実、「あの日」、浪江町は、避難にとって最も肝心な情報が入らないという窮地での対応を求められたのだ。現実の危機事態では、百点満点を取ることを前提にした準備よりも、満点どころか50点も危ないぞという「窮地でも次善」の手を着実に打って、そこから60点、70点へと合格ラインまで状況を引き上げていく反発力が重要となる。そのことを痛感した浪江町の新たな計画は、「形式的理想性」よりも、むしろ「現実的実効性」を重視したものになっているわけだ。

私たちは、いま一度、「あの日」に立ち返る必要がある。

矢守 克也氏

プロフィール Profile

1963年生まれ

大阪大学大学院人間科学研究科博士課程単位取得退学

京都大学防災研究所教授

(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構 阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター上級研究員